

## 第2回 和歌山市立学校適正規模適正配置調査検討委員会 会議録概要

《日時》 平成20年8月29日（金）午後3時～午後4時30分

《場所》 勤労者総合センター 4階 会議室

《出席者》 和歌山市立学校適正規模適正配置調査検討委員会委員（13人）敬称略

会長 矢菰喜孝（和歌山大学教育学部 教授）  
副会長 杉山清一（和歌山市自治会連絡協議会 会長）  
委員 足立基浩（和歌山大学経済学部 准教授）  
川野雅章（和歌山商工会議所 青年部監事）  
神崎務（楠見小学校 教諭）  
貴志節子（前広瀬小学校 校長）  
金原佐知子（伏虎中学校 教諭）  
坂下重幸（和歌山市小学校PTA連合会 会長）  
田中志保（弁護士）  
鳥居賀柄子（宮前小学校 校長）  
野間弓子（前加太中学校 校長）  
矢野幸茂（和歌山市中学校PTA連合会 会長）  
米田哲朗（河西中学校 校長）

事務局（11人）

教育局長 樫原義信  
教育総務部長 原一起、学校教育部長 澤井勉  
教育総務課長 川口雅広、教育施設課長 坂上賢一郎  
学校教育課長 三木勇次、教職員課副課長 山本昌之  
教育総務課副課長 坂東貞次、教育総務課専門教育監補 楠見健  
教育政策班長 田中利幸、教育総務課企画員 中村智裕

《会議次第》

- (1) 開会
- (2) 配布資料確認
  - 配布資料
    - 資料1・・・議案関係資料
- (3) 前回の会議内容確認
- (4) 議事
  - ①小規模校のメリット、デメリットについて
  - ②大規模校のメリット、デメリットについて
  - ③適正規模化の必要性、課題や不安要素について
  - ④その他
- (5) 閉会

## 《会議内容》

1. 前回の会議内容確認  
会議録と会議録の概要が承認された。
2. 事務局からの説明
  - ・学級数別学校数の資料の中学校版を作成した。
  - ・中核市の概要と学校適正規模化等に関する取組状況について説明した。  
7割程度の市で準備中を含め取組中あるいは実施中となっている。
  - ・平成19年度全国学力・学習状況調査に基づく学校規模別及び学級規模別に見た分析結果について説明した。  
県内の公立校が対象、第6学年の児童が対象、出題された学習内容についての結果、標本数が少ない項目がある等に注意した上で、「あまり差はみられない」結果となっている。
3. 小規模校・大規模校のメリット・デメリット、適正規模化の必要性、課題や不安要素についての意見交換
4. 主な意見
  - ・適正規模化に取り組んでない市はどんな事情があるのか。
  - ・目が行き届くということであれば、学級数より学級の人数によるところが大きい。
  - ・小学校は、学級あたりの児童数30人未満、学年で3学級が理想的と思う。
  - ・クラス替えができるのは、子どもの成長やいじめ対策に大きなメリットがある。また、教師にとっても同学年の担任同士で相談できる環境は重要である。
  - ・通学距離や安全性のほか、中学校区、地域の特性、同和問題などについても考慮しておかねばならない。
  - ・小規模になると仲良く育つ反面、温室育ち的などところも出てくる。
  - ・1学年1学級では、問題が生じたとき6年生まで抱えることになる。
  - ・大規模になりすぎるとトラブルも多くなり、複雑化する。
  - ・適正規模化が現実的に無理な場合も多い。
  - ・地域との一体感が子どもを育てていく。地域性を考えた学校づくりが必要である。
  - ・義務教育9年間を縦に見て効果的な学習成果をあげていく視点をもつ。
  - ・学校の規模を効果的になるよう考えることは大切であるが、地域の意向を十分聞いた上で行わねばならない。
  - ・子どもが公平に学習できるような環境をつくるべきである。
  - ・1学年1学級では回避できない問題がある。
  - ・現行制度を前提として議論をしなければ実効性がなくなる。
  - ・具体的な話になると、地域の事情を理解することが必要である。
  - ・地域の特性を勘案し小規模でもそれを活かす方法を考えることも必要である。
  - ・自分を磨くため、学力を向上させるため、適度の規模は必要である。
  - ・学校と地域の結びつきは、非常に強い。
  - ・施設の利用面や学校運営面でも適正な規模が望ましい。